

松田静心さんの作品に想うこと

私は色にうるさい男である。幼い頃から「光と影」に興味を持ち、「かたち」のある陶器や彫刻が好きになった。そんな人間にとって、絵画という平面の表現には、余程の事がないと興味を惹かれない。ましてや日本人はくすんだ色を好んで使うため、明暗がハッキリしないことが多い。そうなれば色彩による論理など期待できず、色は個性なく、語り掛けて来ないことが殆どである。だが松田さんの色は美しい。色の静謐を感じる。静かに佇んだ色だが、静寂ではない。凜とした色の気品と気迫には、爆発的なエネルギーが内包されたように感じる。松田さんの色には、他者を邪魔して主張する愚かさなど微塵もなく、ただひたすら温かい波動で周囲の家具や人を包み込む。桜島の火山灰なのか、松田静心の特性か、その辺りを読み解くのは大変興味深い命題だ。「灰に帰す」とは、「無に帰する」こと。或は死を意味する。無や死から、ここまで鮮やかな「色の生」が産み出されるとは、誰の想像をも超えた、まさに驚きの至芸である。松田静心の「黒」には黒楽と同じ宇宙がある。黒楽とそこに練られた濃茶が生み出すコントラストは、観る者を深淵なる世界に引きずり込んでゆく。そんな不思議な「ちから」を、私は松田静心の色に感じるのだ。

指揮者
村中大祐